

# 外国人研究者招聘による研究報告書

招聘担当者氏名 U. Nennstiel

以下の通り大学院における外国人研究者招聘による研究活動について報告いたします。

|   |  |
|---|--|
| 招聘した外国人研究者  | 所属研究機関名等：<br>ブランデンブルグ 工科大学 コットブス・センフテンベルグ<br><br>氏名：Newiak、Maxim Denis (ネヴィアック マクシム デニス) |
| 招聘期間  | 2023年01月10日～2023年01月30日  |
| 研究活動の概要及び成果   |  |
| <p>大学院の授業の担当のほか、本学の教員と共同研究活動に取り組み、教員向けの講演・交流会をも開催した。その中で孤独増加の背景を理論的に明らかにし議論するとともに、特に子供及び若者の教育領域におけるさらなる孤独化の社会的背景とその変化が生み出す課題、またその中で青少年の健康な成長をサポートする教育者としての課題を議論した。現代社会に典型的となった孤立化を社会の現代化過程の背景の上で理解し、それを様々な社会問題の中で発見し具体的な要因と特徴を日米比較で分析した。多様な形態で表現される孤立が、19世紀から現代までの社会科学の中でどのように扱われてきたかということを確認しつつ、ニーチェ、テニース、福山、ギデンス、バウマンなどの理論の詳細を読みながら、それが孤立・孤独の関連で米国と日本でそれぞれどのような形で表現されてきたかを検討し、それらの具体的な形態の差異と類似性を論じた。また、孤立の対策が19世紀から現在までどのように変わってきたかということ、社会変化の総合的影響に照らし分析し、各々の対策の効果を欧米諸国と日本との比較で検討した。更に、日本と欧米の様々な社会における孤立化の特徴を経験的に理解するために写真やビデオ、様々な時代の映画の典型的な部分を比較分析した。その上で現在、日本で緊急な課題の一つとなっている（特に青少年の）自殺の背景として孤独の増加はどのような役割を演じているかを論じ、孤独増加の背景と具体的な条件を探求しつつ、現在形の社会的条件の中で可能な対策を検討し論じた。孤独感は古代から人間の本質の一部と捉えられていたことはギリシャ哲学から明らかになるが、孤独感の恐ろしい増加は資本主義の普遍化と密接に結びついていることも明白であり、それは政治や政策、各地域の伝統や文化、日常生活や価値感に様々な形で関連・影響する。孤独感を増やすと多く指摘されているデジタル化が逆に遠く離れた人たちの間のバーチャル世界での新たなコミュニティの構築を可能にし孤独をのりこえる機会をも提供し得るかどうかについて、今後さらに検討する余地があるだろうということが明確になった。また我々現代人の困難の特徴については、次の様に描くことができるという議論に至った。私たちが慣れ親しんだこの生活を放棄する意思があるのは、ごく一部の人間だけである。それどころか、快適さ、機動性、刺激、つまり最も広い意味での繁栄に対する私たちの増大する欲求を満たすためには、近代化は常により加速して進行することが必要となるが、この条件をみたとすような近代化は実現し得ない。孤独の経験は人間であることの一部であり、これは近代以来のことだけではない。時々孤独を感じるのは、人間であることに属する基本的な実存的経験であり、文化や時代を超えて常である。人間として私たちは皆、「自己完結型」ユニットとして、元々仲間の人間から分離されている体に閉じ込められていることに気づいている。生まれてから私たちは一人である、最悪の場合見知らぬ人々の中の見知らぬ人間であり、その後には起こることはすべて、この人間が経験する孤独との戦いである。私たちは自分自身を理解させ、相手の考え、感情、欲求を少なくとも推測するために、（他人の頭の中を見ることはできないので）言語（口頭およびボディランゲージ）の助けを借りてコミュニケーションをとっており、場合によっては他人に共感させることができるようになる。私たちと他者との間のギャップを狭めるために私たちは精神的および肉体的に他</p> |  |

者に近づき、最善の場合には例えば、予想通りに行動したり、約束を守ったりすることによって信頼関係を作ったり相手の信頼を得られたりし、一時的にそのギャップを克服することがある。私たちの周りの人々が日常生活で自分の役割を果たし、自分の仕事を追求し、自分自身の利益のためだけでなく、すべての人の利益のために行動しているというこの相互の保証だけが、私たちが互いに交流し社会に生きることを可能にする。